

農村の活性化と都市農業の理解
促進に向けた
新たな協同をめざして



第6号

2014年11月発行

JA都市農村交流全国協議会・会報誌

クロス・カントリー



11月11日～12日 基礎研修会Ⅲの様子



JA都市農村交流全国協議会

JA都市農村交流全国協議会 会報誌について

会報誌「**クロス・カントリー**」の第5号は、平成26年度3回目の発行です。

今回は、協議会の活動報告として11月に開催した「基礎研修会Ⅲ」の開催報告を中心に掲載しております。

なお、この会報誌は会員活動の一環として、協議会、会員活動の報告をはじめ各種情報提供のため、年4回(5月、8月、11月、2月)発行いたします。

JA都市農村交流全国協議会事務局

~~会報誌の主な構成~~

《協議会活動》 P 3-7

基礎研修会Ⅲの開催報告です。

《研修会・セミナーのご案内》 P 7

基礎研修会Ⅲの開催の開催報告と婚活セミナー開催（予告案内）

《支援隊レポート》 P 8-9

平成26年度JAグループ支援隊の活動が終了しました。

《協議会の制度》 P 9-10

交流助成制度についてのご案内です。

《お知らせ》 P 10

フード・アクション・ニッポン・アワード2014

≪協議会活動≫

基礎研修会Ⅲの開催報告



外部（地域）団体との連携を 学びました

平成26年度都市農村交流基礎研修会Ⅲを新潟県内で11月11日～12日の2日間の日程で開催しました。

基礎研修会Ⅲの基本テーマは、「外部（地域）団体との連携」であり、目的は今後JAに強く求められる地域連携による地域活性化・JAファンづくりでした。

研修プログラムは①30年以上にもわたり続いているJAと生協の交流活動②農業特区新潟市の取り組みを中心に参加者間で情報交換を行い、取り組みの悩みや課題を共有し、地域連携による都市と農村の交流活動の重要性を確認しました。

□開催期日：

平成26年11月11日（火）
～12日（水）

□研修場所：

- ・JAささかみ（新潟県阿賀野市）
- ・新潟市アグリパーク（新潟市南区）

□参加者数：計24名

（JA11名、中央会・全農県本部6名、全国機関他7名）

研修1日目

場所：JAささかみ大豆加工体験施設

清田組合長と江口専務よりJAの概要、取組み、交流事業についてご紹介をいただきました。JAささかみの地域は、米作の単作地帯で、合併前の旧笹神村が「土づくりは、村づくり」を合言葉に全国に先駆けて平成2年「ゆうきの里」宣言をし、翌年に建設された「ゆうきセンター」で生産される良質な堆肥を使用した環境保全型農業に取組み、全ての米は5割以上の減減栽培となっています。

6次産業化では昭和57年にもちの加工から始まり、しめ飾り、日本酒の開発、豆腐づくりと先進的に取り組んでいます。

また、昭和53年から続く生協（パルシステム）と産直事業と交流事業では、管内の転作大豆と名水を利用し、消費者に安全でおいしい豆腐を提供したいとの思いから、大豆加工体験施設（豆腐工場）が平成14年に建設され、子どもたちや親子に豆腐づくりの体験が開始されました。交流ツアーでは田植え、稲刈りの他にサマーキャンプ、冬の火祭りなども組込み、1年を通してささかみ体験ができる内容になっており、パルシステムの役職員の研修の受入や出前授業等、消費者にとどまらずパルシステム役職員との交流による「絆」づくりが続いています。

「パルシステムとのつながりの中で産直品ができたし、地域の中だけではわからなかったことが、交流で色々な

方がこの地に訪れていただき、アドバイスを受けてこの地域が発展してきた」と江口専務は力説されました。

「ゆうきセンター」の見学では、畜産農家からの畜糞、稲作農家からの籾殻、豆腐工場からのオカラを原料として堆肥や肥料を生産することで資源の循環がされている様子を見学しました。

1日目の研修終了後、新潟市内で行われた交流会では江口専務、JA交流担当者の山崎さんにもご参加いただき、他地域の取組みや課題などについて参加者との有意義な意見交換の場となりました。



JAささかみ 清田組合長（右）、江口専務（左）

研修2日目

場所：新潟市アグリパーク

2日目は、平成26年6月28日にオープンした全国初の公立教育ファーム「新潟市アグリパーク」を訪れました。

坪川統括館長より農業に触れ、親しみ、農業を学ぶ場を提供する、農産物の生産から加工、販売を担う6次産業化を推進する地元の農家、JAと連携

し、時代の農業の担い手を育成する施設の内容や特徴、子どもたちが農業体験を通して食の大切さ、農業を学び、ふるさとへの愛情や誇り、生きる力を養うために設置した全国初の「教育ファーム」であることの説明をいただきました。

新潟市内の小学校では、農業体験、食育を実施する教育ファーム（体験学習プログラム）が行われており、アグリパークでは教育委員会が中心となって作成した、農業体験「アグリ・スタディ・プログラム」を実施しており、この日も市内の小学生が訪れていました。

説明後、パーク内の体験圃場、体験ハウス、宿泊棟、食品加工施設等を見学し、充実した施設に対して、参加者からは羨む声もありました。

平成26年5月1日に国家戦略特区に指定された新潟市の経済部産業政策課ニューフードバレー推進室の小出係長より新潟市国家戦略特区のテーマは「大規模農業の改革拠点」であり、特区における規制緩和の概要、推進体制、今後の展開、さらには農業の新たな価値を創造する12次産業化への取組みに関する説明がありました。

記念講演として(有)フジタファームの藤田代表取締役より「土地利用型農業による6次化」と題して酪農経営における安全・安心な生乳生産に向けての自給粗飼料生産、耕畜連携による循環型農業の実践、6次化におけるジェラ

ートの販売を地域に先駆けて取組み、酪農体験を通じた消費者との交流による地域の活性化と酪農の理解促進への取組みについて講演をしていただきました。

藤田代表は、酪農は休みが取れない。従業員を雇用して休日の取れる仕事にしたい。そのためには規模拡大が必要であり、土地利用型として土地に還元できる仕組みを作りたいと、メガファームと家族経営とがうまく行われているアメリカの酪農を見て回り、メガファームの方式を導入できないかと考えたが、メガファームよりも家族経営で糞尿処理、飼料の調達を自家で行う方式を導入することを考えついたそうです。そのために稲作農家と連携し、現在の耕畜連携による循環型農業となっています。その後にはジェラート、チーズの生産販売で6次産業化も展開し、農産物直売所、酪農教育ファームの受入をしていたことから体験交流館もオープンしました。今後は特区による規制緩和（農業用施設用地には農業用施設しか建設できない）で、自社で生産されたミルクや農産物を用いスイーツカフェ、農家レストランの開設を目指しています。



(有)フジタファーム 藤田代表取締役

研修の最後は「新たな連携の創造」をテーマに「ワールドカフェ」の手法を用いたグループワークを行いました。

参加者同士が自由闊達に話し合い、様々な意見を出し合い、他の地域・JAの取組みなどを参考とし、新たな取組みのヒントや今後の取組みの可能性や重要性を感じることが出来たと思います。

グループワークで記入された キーワード・気付き（抜粋）

- JA内ですら連携出来ていない
- 全国連が縦割りで連携出来ていない
- 連合会がしっかりしなければ
- JAの活動の情報交換の場が必要
- 他の組織の話聞くことも大事
- JAの時代遅れの部分を企業のノウハウを吸い上げる
- 農家の思い、ストーリーを伝えたい
- 県内各JAの取組報告会議を開催し県連が取りまとめ
- 継続性の大切さ
- 地域内資源の活用、行政、地元企業とも連携
- 世代別の連携・農家の育成・アシストする役割
- 高齢化問題
- 全国連の連携
- 幼少期からの食育
- JAファンづくり
- 選ぶ時代
- 協同組合のコラボ
- 地域活性化のアシストをJA、全農
- 農業新聞、家の光の普及の意味は？
職員が理解していない、有効に活用す

るには

- もっとオープンに
- 否定からは何も生まれない
- 身の丈にあった連携、何から手をつけるのか
- 親の世代との連携がない、子どもはあるが
- 担い手がテーマ
- 次世代の育成
- 全農とコンビニ
- 送り出す側のメリット
- 直売所のノウハウもデータとしてまとめておくべき
- J A、学生、地元企業との連携
- 企業から学ぶことも必要
- 対象者、ターゲットはどうするのか
- 何のためにやるのか目的をはっきりさせないと
- アグリスクールの親はJ Aをよく知らない
- 会議だけではなく動くこと



ワールドカフェによる話し合いによる
キーワード・気付きを自由に記入

<参加者のアンケートより抜粋>

- J A ささかみの取組みについて
 - ・生協との長い「人と人との関係」が産地を支えている。こういった取組みを拡大することが今後必要。
 - ・環境循環型農業、地域資源をフル活用し、栽培や交流をしているスタイルはJ A本来の姿を維持しつつ、次世代も育てている取組みは参考になりました。
 - ・生販の協調が素晴らしい。J Aとして取組まなければならない本質を生で学ばせてもらいました。
- 新潟市アグリパークについて
 - ・宿泊施設も完備し、大規模に展開している。今後に注目したい。
 - ・自分の地域でのイメージがブラッシュアップできた。
 - ・施設が立派でうらやましい！これだけの施設があるとプログラムもかなり考えられると思います。
- 新潟市国家戦略特区の展開
 - ・特区の概要から取組みまでわかりやすく説明していただきました。これからの展開が楽しみです。
 - ・新潟市の取組みと提案が良かった。
 - ・特区についてほとんど知識がなかったが、内容がよく理解できた。
- (有)フジタファームの取組みについて
 - ・担い手農家といわれる大規模農家の思いが理解できた。
 - ・コスト削減、消費者とのコミュニケーション等、具体的な事例が学習できた。
 - ・取組みからJ Aに期待するもの、T P P、食の安全について等の考え方

を聞くことができて良かった。

○グループワークについて

- ・大小に関係ない連携と継続が必要と感じた。
- ・参加者の考え方、連携の方法を知ることが出来た。
- ・ワールドカフェというスタイルが面白い方法で、今後活用して見たいと思います。



研修参加者

新潟市アグリパークを見学する参加者(新潟県)

地域振興策学ぶ 全中が都市農村交流基礎研修会

【新潟】JA全中とJA都市農村交流全国協議会は11、12の2日間、新潟県内で、2014年度JA都市農村交流基礎研修会を開いた。JA施設や公立教育ファームの見学や交流、地域連携による地域活性化や産地交流などの取り組みを学ぶ、交流活動の一層の展開を目指す。研修会には9都府県のJAや中央会職員ら26人が参加した。

12日は新潟市南区の新潟市アグリパークを見学した。

初日は阿賀野市のJA A都市農村交流全国協議会が、JAの清田浩一組長と江口駿専務が、地域全体で取り組む環境向、有機循環型農業を基本に、首都圏や県内の生産者の農産物産直事業、交流内容などを説明。駆作大豆加工する豆腐工場や、地域内資源を活用して堆肥を生産するようセミナーなどを開いた。

新潟市ニューロードパレー推進委の小出隆嗣特別委員長が「新潟市国家戦略特別区 大規模農家の改革拠点について」をテーマに、規制緩和の概要や推進体制など取り組みを紹介した。同市西蒲区の佃フジタファームの藤田毅代表は「土産利用型農業による6次産業化」と題し、同社の酪農経営と自給飼料生産や耕畜連携、同社の活用、シェアリングなどについて紹介した。この他、「新たな連携の創造」をテーマに、グループワークで意見交換した。

(11/14 日本農業新聞)

《研修会・セミナーのご案内》

婚活セミナー開催案内



婚活セミナーを開催します【予告案内】

今年度の研究テーマでもあった「婚活」に関して、JA・中央会担当者向けのセミナーを以下のおり開催を計画しています。正式には文書にてご案内しますが概略のみ予告いたします。

目的

地域農業の担い手支援として、独身青年農業者のパートナー探し、出会いの場づくりとして取組まれている「婚活」に関する現状把握や実践事例などを共有し、各地の婚活への取組みが活発化することを期して開催します。

□開催期日

平成27年2月27日（金）

□会場

Nツアービル 8階会議室
（東京都 秋葉原）

□対象者

JA・中央会担当者等

□参加費

後日発表

□定員

30名程度

□講師

結婚相談サービス業界、アパレル業界、情報サービス業界より最前線でご活躍されている講師陣をお招きします。

《支援隊レポート》

J Aグループ支援隊

(情報提供：農協観光 工藤篤志さん)

平成26年度J Aグループ支援隊

平成26年度J Aグループ支援隊の活動が10月までで終了しました。5月からの6カ月間、全国から合計342名の仲間が東日本大震災の被災地域に行き、生産者を応援しました。参加者の感想では「直接見る現地は、感じるものが何もかも違った」というコメントが最も多いです。風化させること無く、それぞれが出来るスタイルの交流を続けていくことが重要です。



(写真は宮城県での作業の様子です。)

4年間のJ Aグループ支援隊活動実績

平成23年3月11日発生の東日本大震災による地域農業や組合員の甚大な被害に対し、J Aグループでは4年にわたり、役職員によるJ Aグループ支援隊を派遣してきました。

被災地では営農再開する組合員が徐々に増えているとはいえ、津波浸水からの農地復旧作業から農作業まで、まだまだ人手を必要とする状況にあります。4年間で4,214名が参加し、復旧へのお手伝いに汗を流し交流を深めるだけでなく、報道では知ることができない現地状況を理解し、被災地を忘れない想いをJ Aグループ全体に伝えています。

今年度の主な実施状況などは次の通りです。

岩手県

山田町で、ハウスの解体・斜面での整地と植樹・仮設住宅周囲の草刈り

宮城県

仙台市・七ヶ浜町・南三陸町・気仙沼市などで、農地の瓦礫拾い・草刈り・農作業の手伝いなどを行なった。

◎ 仙台市

海浜部農業地帯（藤塚・井戸地区）の生産組合法人への援農活動。

野菜の定植・水耕栽培用チューブ作成・草取りなどの農作業支援、および未だ細かい瓦礫が残る農地の瓦礫除去。

◎ 七ヶ浜町

未だ細かい瓦礫が残る農地の瓦礫除去。

◎ 南三陸町・気仙沼市

復興生産組合・生産者への援農活動。
フキの刈り取り・ポッドへの土入れ作
業・草取り・芽かきなどの農作業支援、
および袋詰めなどの出荷作業手伝い。

■東日本大震災被災地への4年間のJAグループ支援隊派遣実績

参加人数合計 4,214名

| | | |
|-------------|--------|-------------------------|
| 2011年4月～10月 | 2,177名 | (岩手902名・宮城1,212名・福島63名) |
| 2012年5月～12月 | 1,101名 | (岩手106名・宮城1,051名・福島20名) |
| 2013年5月～11月 | 594名 | (岩手43名・宮城507名・福島44名) |
| 2014年5月～10月 | 342名 | (岩手24名・宮城318名) |

(JAグループ支援隊事務局)

≪協議会の制度≫

JA都市農村交流助成金

JA都市農村交流助成制度について

9月に会員に対してご案内しております。この助成制度は、当協議会として平成24年度に実施した経過にありますが、会員の「都市農村交流」の促進を一層図ることから助成範囲を拡大しております。

助成交付金については、予算上20会員の申請の先着順を基本としておりますので、お早めにお申し込みをいただきますようお願いいたします。

(11月現在2会員の申込申請有)

助成概要

1. 助成対象

(1) 対象団体

JA都市農村交流全国協議会会員のJAおよび都道府県会員。但し、全国機関・賛助会員・学校教育機関会員は含まない。

(2) 対象事業・条件・助成金額

平成26年度の計画事業・活動、かつ平成27年3月までに実施の以下の事項を対象とする。

①新たな都市農村交流等の体験企画の取組みに関する貸切バス代金や募集チラシ・WEBページ作成費の一部。

1申請上限3万円(税込)を助成する。
※例年実施している交流企画は対象外とする。

②JA・中央会職員等を対象とした都市農村交流等の取組みに関する人材育成のための勉強会の講師謝金・旅費の一部。

1申請上限3万円(税込)を助成する。
③本協議会が認めたJAグループ主催の研修会・セミナーへの参加費の一部。一人当たり上限5千円(税込)を助成する。但し、1研修会・セミナーにつき1会員2名までとする。

<助成対象研修・セミナー>

◆平成26年度

リスクマネジメント研修会

【基本編・上級編】

(11月から2月まで全国複数個所で開催します)

○開催目的

- ・農山漁村体験活動を実施する上での、事前対策・安全管理について実践的な知識を習得します。
- ・リスクマネジメントの専門家の講義

やワークショップを通じ、安全管理マニュアルの作成手法を学びます。

- ・受入れ協議会やイベント主催者側（農林漁業体験活動）に対して、リスク対策を講じることで、受入れ体制の構築を目的とします。

○講義内容

- ・安全管理についての基本的な考え方
- ・事故事例分析
- ・受入準備段階における留意点について等

○受講料

基本編 11,000円→6,000円(助成後)

上級編 26,000円→21,000円(助成後)

[主催：子ども農山漁村交流プロジェクト研究会／(一社)全国農協観光協会]

研修会詳細情報

(一社)全国農協観光協会ホームページにある「子ども農山漁村交流プロジェクト研究会」のバナーより入ります。

<http://www.znk.or.jp/kodomo/>

◆平成26年度

「全国JA家の光食農教育リーダー研修会」
すぐに使える！

食農教育の実践的手法

日時：平成27年2月25日(水)13:00
～2月26日(木)13:00

会場：飯田橋レインボービル

対象：JA食農教育担当者、JA青年・女性リーダー等

定員：70名

参加費：10,000円→5,000円(助成後)

主催：(一社)家の光協会

後援：全国農業協同組合中央会

※研修会の詳細および申請方法等の詳細は、当協議会ホームページでも確認いただけます。

検索都市農村交流全国協議会

《お知らせ》



株農協観光が審査員特別賞を受賞

株農協観光がフード・アクション・ニッポン アワード2014で審査員特別賞を受賞

都市と農村を結んで食農教育
「JAこども村」



株農協観光が全国のJAと取り組む小学生を対象とした農村体験旅行「JAこども村」が、農林水産省が主催するフード・アクション・ニッポン アワード2014で「審査委員特別賞」を受賞しました。JAこども村が開始されたのは昭和46年。多い時には年間8,000名が参加し現在まで、都市と農村の交流を通して日本の食に触れる機会をたくさんの子供たちに提供してきました。

その他の受賞者など、詳しくはホームページをご覧ください。

検索フード・アクション・ニッポンアワード 2014

J A都市農村交流全国協議会 事務局 (J A全中 暮らしの活動推進課)

HP : <http://ja-koryu.com/> TEL03 (6665) 6240 (代)

担当：石岡・石井

*掲載内容に関するご意見・ご質問など、お気軽にお問い合わせ下さい。